

屋島の名所旧跡

屋島は、屋島東町・屋島中町・屋島西町の北にあり、史跡が多く、東西3.1キロメートル、南北5.3キロメートルの半島で、山麓を一周する回遊道路があり、海拔293メートルの展望台のような山容の山岳で、昭和4年4月南嶺にケブルカが建設された。

山頂の平地には屋島寺があり、この寺の東部には水族館があり、旅館・ホテル・土産物店などもある。

これらの商店なども、中国と四国を結ぶ瀬戸大橋が開通してから数年は、往年の繁栄を取り戻した感があったが、現在では観光客の減少で山全体に活気がみえない。

- | | | | |
|-------------|--------------|--------------|------------|
| 2 屋島古城址 | 3 宮窪 | 4 櫓ヶ丘 | 5 板碑 |
| 6 赤牛崎 | 7 壇の浦 | 8 義経の弓流しの跡 | 9 菊王丸の墓 |
| 10 佐藤嗣信碑 | 11 瑠璃宝池 | 12 経塚 | 13 鉢の廻門の跡 |
| 14 不喰梨 | 15 加持水 | 16 可正桜 | 17 屋島山 |
| 18 長崎鼻 | 19 南嶺 | 20 北嶺 | 21 豊石 |
| 22 名号石 | 23 談古嶺 | 24 新談古嶺 | 25 瞰蹟亭 |
| 26 千間堂 | 27 遊鶴亭 | 28 相引川 | 29 見返橋 |
| 30 亥浜塩田の跡 | 31 屋島神社 | 32 大宮八幡宮 | 33 八坂神社 |
| 34 鵜羽神社 | 35 安徳天皇社 | 36 鐘掛松の跡 | 37 屋島寺 |
| 38 仰之碑 | 39 雪の庭 | 40 摂政宮御登臨記念碑 | 41 獅子の靈巖 |
| 42 地藏寺 | 43 忠名屋敷の跡 | 44 梶原景山の碑 | 45 浦生 |
| 46 屋島の古墳 | | | |
| (1) 長崎古墳 | (2) 浜北1号古墳 | (3) 浜北2号古墳 | (4) 浜北3号古墳 |
| (5) 中筋北古墳群 | (6) 谷東古墳 | (7) 中央西古墳 | (8) 中央東古墳跡 |
| (9) 東山地1号古墳 | (10) 東山地2号古墳 | (11) 三崎古墳群跡 | (12) 経塚下古墳 |
| (13) 萩山古墳跡 | (14) 浜北4号古墳 | | |

2 屋島古城址

屋島山の南嶺・北嶺の中間を櫓ヶ丘と称し、その西側の山腹に古城址がある。

この古城址は朝鮮式の築城法によるもので、その構造は屋島の南嶺と北嶺との間の西側の溪谷をとりいれ、長さは南東より北東にかけて約3キロメートル、広さは最広部で約0.5キロメートル、周囲約7.8キロメートルにわたる大規模の山城である。

この城は齋明天皇の御代に征韓の戦いに敗れ、辺海において事を構えることが多く、度々出兵することがあったので、天智天皇6年(667)冬11月、屋島と備前児島間の備讃水路は軍事上作戦の要路としての重要性をもち、関門は西国九州への入口であると同時に、屋島付近は四国山陽の要路であったことにより、屋島に城を築いて唐の侵入に備えた。

日本書記に曰く、

「天智天皇六年十一月築大和国高安城讃岐国山田郡屋島城対馬金田城是讃岐国二於ケル城壘ノ初メ也」





3 宮窪（ミヤノクボ）

屋島東町石場にある。

貞観元年(855)九州宇佐八幡宮の御神体を、山城国石清水八幡宮へ遷宮しようとして、御船が屋島の沖にさしかかった時、たまたま暴風雨に遭遇したのでこの浦へ避難し、後、風波が静まったので幣を3振りこの地に立てて出発した。

この後、里人は、ここへ小祠を建て産土神としてお祀りしたことにより、この地を宮窪という。



4 櫓ヶ丘

北嶺の屋島古城址の上の平坦部をいう。

考謙天皇天平勝宝6年(754)唐僧鑑真和上がこの所の上に屋島寺を創建した。
今その跡を千間堂という。



5 板碑

屋島東町檀の浦立石港の北西隅にある。

庵治石（花崗岩・高さ約 1.5メートル幅下部約 1メートル）を用い上部に梵字蓮弁を彫刻をし、

その下に、

『慶長十三年十月二十四日洲崎助七（州崎宗助）』と彫刻してある。これは石塔婆の一種であって、亡者の追善供養の為に建設されたものである、とある。

板碑は関東地方において、鎌倉時代より室町時代にかけて流行した。関西地方においては極く稀に見られものである。

平成13年現地で調査したところ、太平洋戦後立石港は度々改修されたので、防波堤・岸壁の岸線が多少変更され、また、土地造成のため板碑は内陸の道路縁に移動し、碑文の文字も相当摩耗しているうえに、深く埋められているため、「洲とサンズイに寄」の2字のみしか判読できなかった。



6 赤牛崎（アカバザキ）

屋島東町三崎にある。

屋島源平合戦の時、源氏が宇龍ガ丘に陣をしいて屋島の平氏を攻めようとしたが、源平両陣の間は約3キロメートルの海の為、源氏の兵が渡ることができなかった。この時、源氏の武将後藤兵衛実基は、赤牛2頭を放して海底の深さを計って浅瀬を知り、鞍掛松の辺りより源氏の武将が50騎ばかりで、屋島の館に攻め込んだ。この時、実基の子及び佐藤継信、忠信兄弟も参加したといわれている。この牛が泳ぎ着いた所を赤牛崎という。今この場所に牛を祀る牛塚がある。

赤牛崎のことを昔は黄牛崎とっていたと全讃史にあり、古い絵地図にもある。

『全讃史』

昔は相引から海水がめぐり、徒涉りが出来なかったので島とっていた。当時平家はその辺の舟を取り上げたので、義経は悩んでいたところ、高松の里から黄牛が来て渡るのを見て、浅瀬であることを知り、そこを通らせて軍を渡したという。

そこを黄牛崎（あめがさき）と言い。その牛は千疋で、阿野南の千疋からでたとある。今に牛子堂（うしのこどう）がある。と記してある。



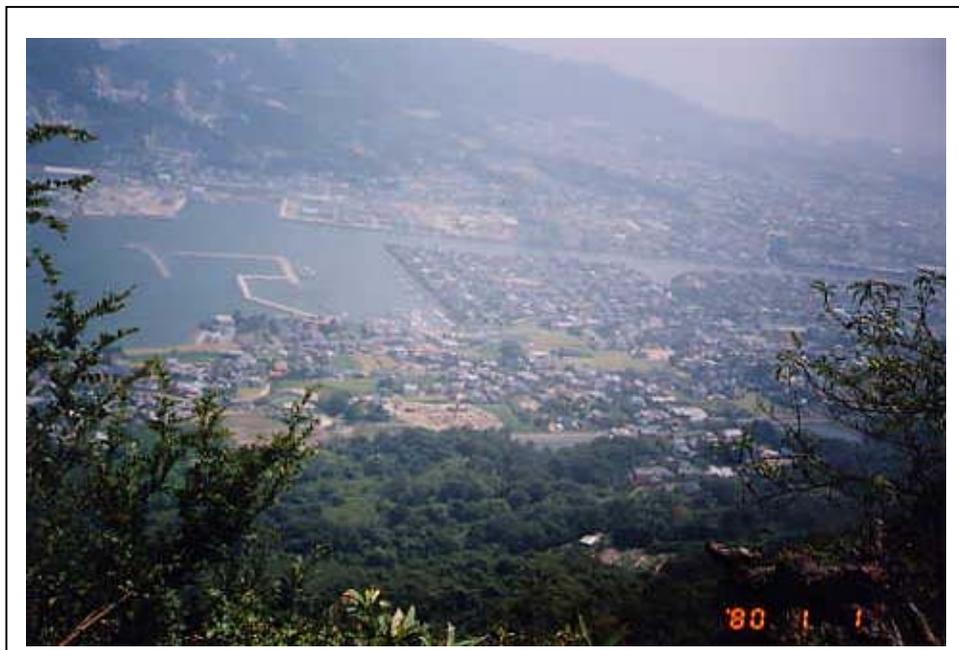
7 檀の浦

天智天皇6年冬11月屋島に城を築き要塞と定められた。その場所が所謂屋島軍団が置かれた所で、軍団のあった関係から昔は団浦と言っていたが、音読によって檀浦と言われるようになった。源平の屋島合戦当時にも既に檀浦と称していたことは、全性法師が平行盛に与えた玉葉和歌集に掲載されている和歌の前書きに、檀浦とあることによって明らかである。

ここは源平の古戦場で史跡が多く、源平合戦の時安徳天皇の行宮であった安徳天皇社・佐藤忠信によって射殺された菊王丸の墓・平家の落人七人道者の墓など、また、檀の浦の向かいの牟礼町には、那須与一の扇の的、義経の弓流し、歌舞伎でよく上演される景清の綴引き等枚挙に暇がない。

また所謂、平氏の怨霊がこもると言われる平家蟹はここに産すといわれる。

また、この浦を北に行けば海岸に縁取石という珍しい石がある。



8 義経の弓流しの跡

先人の記録によれば、屋島東町藤目高橋にあるとあり。牟礼町史によれば、牟礼町の州崎寺の西南約100メートルのほとりで、現在は陸地になっている所となっている。義経が2回も弓を海上に落としたとは考えられないので、いずれにしてもこの2カ所は近くであるので、同じ場所であろう。

寿永4年源平合戦のとき、義経は平家の軍船を追って海に進み、たまたま弓を海上に落とした。これを見た平家の武将越中次郎兵衛盛嗣がこれを奪わんとした時、名を惜しむ義経は危険を冒して遂に弓を拾いあげた。



9 菊王丸の墓

屋島東町屋島東小学校の校門の北側にある。

菊王丸は平家の猛将能登守教経の郎党であった。寿永4年2月屋島合戦の時、源氏の将佐藤嗣信が教経のため射落とされて落馬すると、萌黄緞の腹巻に身を固めた十八才の美少年菊王丸は、大刀を抜いて飛びかかり嗣信の首を取ろうとした。

その時、嗣信の弟忠信の放った矢に、腹巻の引合を射貫かれて倒れ伏した。能登守は左手に弓を持ちながら、右手に菊王丸を掴んで自分の船に投げ入れたが、間もなく菊王丸は息絶えた。忠臣菊王丸が葬られたのがここである。



10 佐藤嗣信碑

屋島東町屋島東麓壇の浦にある。

ここは四国八十八ヶ所の巡拝通路であったから、寛永年中に松平頼重公が、嗣信の戦死の場所でないが、広く世人に知らそうと特に高松藩儒岡部拙斎に命じて、撰文と書を書かかせて建立したものである。



1 1 瑠璃宝池

屋島山上屋島寺の東南にある。

屋島寺の伽藍創建の時、宝珠を根堂の前、東南の地に埋め、その跡に池を築いたので宝池という。

屋島合戦の時、源氏の将兵が刀を洗ったところ、池が紅になつたので、これより血の池とも呼ばれるようになったといわれている。



1 2 経塚

屋島山の南嶺の頂上に、岩片を堆積した一大塚がそれである。昔、ここに経巻を埋めた所といわれている。萬治年中藩主が試しに発掘させたところ、一切経が完全な姿で見られたので、再び元のとおり埋めたという。

1 3 鉢の廻門の跡

屋島北端、長崎鼻の西北の海をいう。

屋島寺記によれば、長崎鼻の約800メートル西北の沖の所で、空鉢上人が、鉢を飛ばして往来の船に食を乞うていたが、あるとき鉢を漁船に投げたところ、漁師が誤って魚を入れたため、たちまちにして鉢が海底に沈んだという。ここを鉢の淵ともいう。



14 不喰梨

屋島登山道の中腹にある。

昔、ここに梨の大樹があって多くの実を結んでいた。

ある日この樹の持主がやってきて、梨の実を取っていたところへ空海上人が通りかかって、「その梨を一つ頂けないか。」とお願いした。

その人は、

「美味しそうに見えますが、苦くて渋くて食べられるものではありません。」

と嘘を言って差し上げなかった。

その後は何故か多くの実を結んでも、無味乾燥で木を噛むような梨になってしまい、持主は自分の邪険で貪欲な心を恥じて、善心に立ち返ったということである。これから後この梨の樹を不喰梨と言うようになり、人々は戒めとしたということである。

この梨は花梨（かりん）でなかったか、という人もある。



15 加持水

屋島登山道の中腹の東側にある。

昔、弘法大師がこの水を誦咒加持し仏天に供養したので、この様に呼称する。傍らに『阿吽』2字を彫刻した碑石があった、これは「阿字石」と称していた。これは弘法大師の筆跡であるという。



16 可正桜

屋島寺四天門前にある。

寛永5年(1628)、高松藩主松平頼重公の寵臣松平半左衛門可正が、老後は屋島で楽しむと桜の苗7株を植えて可正桜と命名した。その後この寺に隠棲すること数年にして没し、この時、6株まで枯死し只1株だけが残りに、現在のような大樹になった。

此の寺の庭に桜を植えおかん	わが後の世の花がたみなり
花の時人きてもしも問ふならば	可正桜と名を知らせてよ
空蝉のからはいづこに埋むとも	名をは屋島の峯に置くなり

墓は屋島寺墓地の側にある。

松平半左衛門可正の墓

親正新助、諱改可正、関原御陣之供奉。其後於伏見家康公蒙御勘気大阪御陣之時被召出兩御陣供奉。家康公他界之時被付水戸藩高松藩祖頼重公供奉。寛永十七年先発高松来。任老後楽詩歌遊屋島寺有常。寛文九巳酉年八月十五日卒 法名 実相院法山可正居士



17 屋島山

屋島山は海拔293メートル、地質は花崗岩を基礎とした溶岩台地で、その上に輝石安山岩あるいは角礫凝灰岩を堆積している。山勢は南より北に流れて、その形状は屋根に似ているので屋島と言い、瀬戸内海に望み展望雄大にして景勝史跡にとんでいる。



18 長崎鼻

屋島の北端眺望絶佳の海岸にある。

昔はこの上に海上の非常に備えるためと、航海者の標識とするために遠見番所が置かれていた。牟礼町久通の鈴木氏はこの後裔である。

嘉永安政以降外国船がしきりに瀬戸内海に出没したので、高松藩では海防を嚴重にするため、東はこの長崎鼻、西は下笠居の神在に藤沢三溪が藩主の命により、砲台を築き数門の大砲を据え付けた。その遺跡は現在残っている。



19 南嶺

屋島山の南部の峰を、南嶺又は南峰という。これを南方より望むと、その形状があたかも富士に似ているので、東西一帯の麓を富士見（現在は藤目と書く）という。

南端の頂上に経塚があり、一切経が埋めたと伝えられている。

屋島寺より約0.5キロメートル、風景は絶佳である。



20 北嶺

談古嶺の北にあり、北嶺又は北峰という。

この嶺より東を遠望すれば、八栗山を越えて海女の玉取りで有名な、志度浦の海を遠望することができる。また越えて津田・鶴羽、また山を越えて引田浦までも眺望することができる。そのまた先につづくのは小鳴門堂浦である。東北には小豆島があり、その先は播磨灘で遙かに見えるのは淡路島である。春は霞がかかるものの、秋はよく風景を賞でることができる。



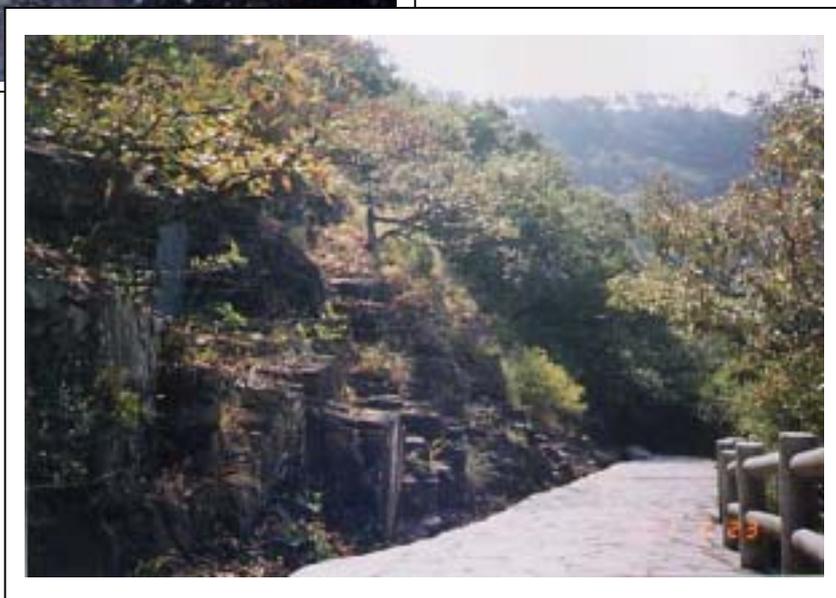
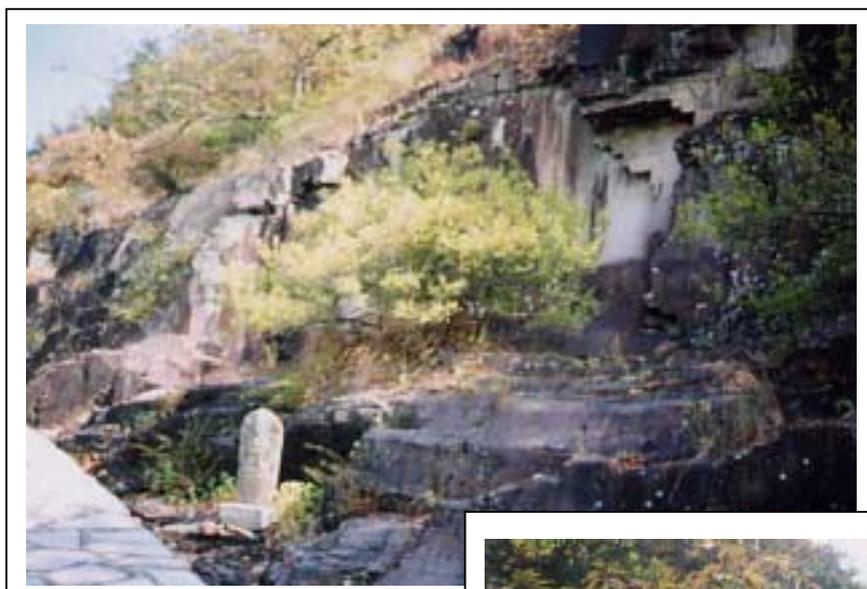
2 1 疊石

屋島登山道の中腹の山側一帯に、疊を重ねた様な奇観を呈する岩石がある。これを俗に疊石という。この岩石は古銅輝石安山岩で、岩漿が冷却したときにできる割目である。この鉱物を学問上板状節理という。(十和田湖畔には柱状節理の岩がある)

この辺りに、西行法師が屋島寺を参詣した時作った和歌の石碑がある。

宿りしてここに仮寝のたたみ石

月はこよひの主なりけり



2 2 名号石

屋島登山道の豊石の北端に、「南無阿弥陀仏」の6字を刻んだ石がある。弘法大師の筆跡であるという。

この石は、心がけの悪い人が拝めば、たちどころに腹痛をおこすことから、腹痛石（ハライタイシ、ハラコワリイシ）とよばれているそうであるが、本当に腹が痛くなった話は聞いたことがないそうである。



2 3 談古嶺

屋島東嶺の展望台というべき場所。

ここは八栗の五剣山の霊峰に向かい合い、源平の古戦場を眼下に見下ろし、風光と史跡に富み旅情を慰めてくれる。



2 4 新談古嶺

談古嶺の南東の辺りで、史跡追懐に適当な所、史跡はここから望むのもまた可なる場所である。

25 瞰蹟亭

屋島山上談古嶺の南にある。

昭和9年に梨本宮殿下が、愛国飛行場の竣工式典に御参列のため高松市へ御出での時、5月23日屋島へ御登山なされて、この所から、昔、源平の戦いがあった古戦場を御覧になられ、この地を瞰蹟亭と御命名された。



五剣山を望む



庵治方面を望む

26 千間堂

談古嶺より北嶺の中間あたりのことをいう。

この辺りは、初め唐僧鑑真和上によって、屋島寺が創建された地で、昔は数多の伽藍のあった旧跡である。千手千眼観音を祀ったお堂があった所から千眼堂ともいう。



27 遊鶴亭

北嶺の北端にある。

大正12年5月久邇宮4殿下、即ち、久邇宮邦彦王殿下・同妃殿下・同良子女王殿下（昭和天皇皇后陛下）・同智子女王殿下（西本願寺大谷光暢氏夫人）の4方が屋島へ来られたとき、屋島の北嶺に立たれて瀬戸内海の大景を眺められ、前年に陸軍大演習の時、昭和天皇もこの絶景を眺められ、次いでこの年、皇后陛下もここに立たれて、この風景を御嘆賞されて特に遊鶴亭と御命名された。



長崎鼻を望む

28 相引川

屋島の東より西へ、麓を囲むように流れる川で、潮汐が別れて満干し、謡曲屋島に、相引く汐とあるのはこの川のことである。屋島合戦の頃は幅が相当広く海のようにあったが、生駒氏が讃岐の守護となったとき、ここに築堤して塩田にしていたが、後、東讃岐の藩主となった松平頼重公が復元して、現在は昔の相引川の面影が残されている。

敵味方引分れぬる武士の

しるしか今に相引の汐

相引の汐干に見たり平家蟹



西の河口

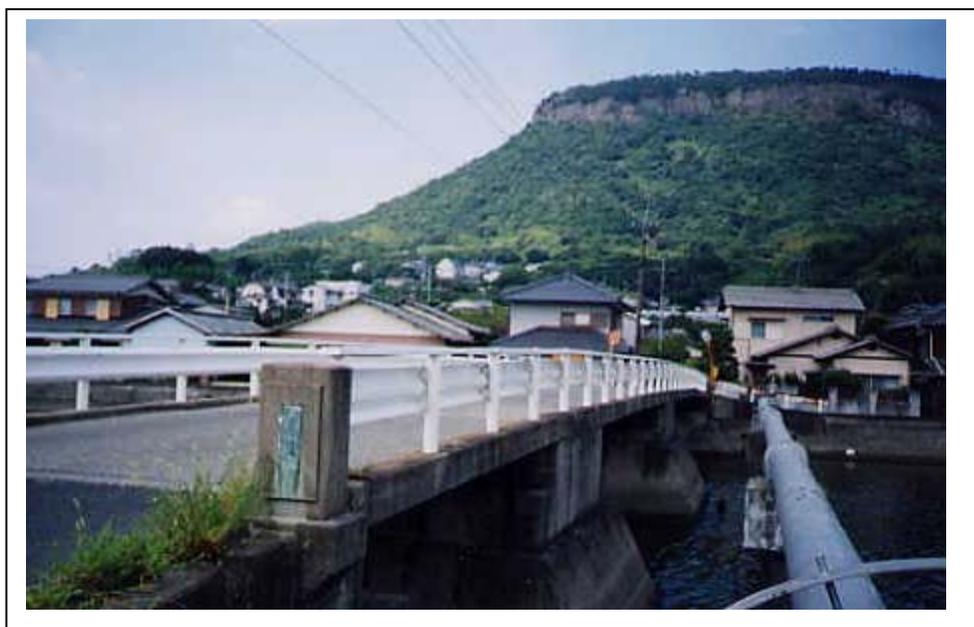


東の河口

29 見返橋

屋島の東南にあり、相引川に架る屋島東町と牟礼町とを連絡する橋で、高橋ともいう。

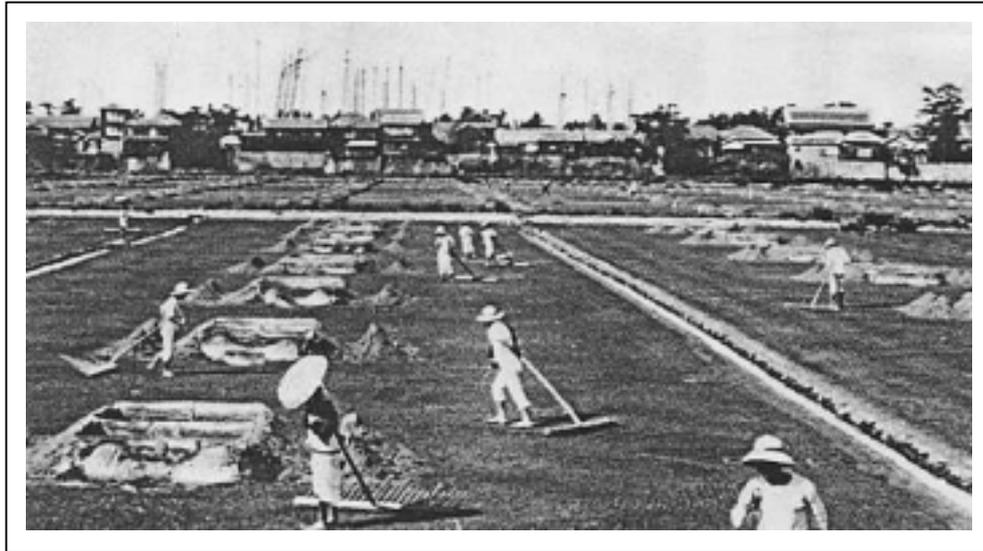
應永年中大内郡（現在の太田郡）誉田虚空蔵院主増伴僧正が、四国を遍歴して屋島山より下向の時、この橋で見返った時、奇瑞があったところとして、後の人がこのように名付けたという。



30 亥浜塩田の跡

昔の地名で大字西潟元（現在の屋島西小学校付近）にあった。宝暦5年（1755）梶原景山が多大の努力と私財を投じて構築した塩田で、当時は潟元塩と称して関西方面に名声を博していた。この塩田のことを古浜ともいう。

註・平成4年現在では、製塩法の改革と土地造成のために住宅地に変貌し、この名を留めるのは当地区に僅か「景山公園」「亥の浜公園」としてのみである。



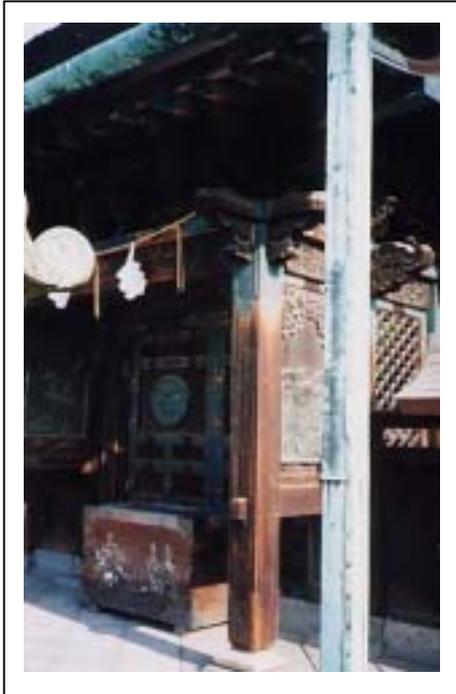
昔の塩田風景



3 1 屋島神社

屋島東町三崎の西部の屋島山麓にある。

寛永年間に高松藩主松平頼重公が、東照大神の祠を香川郡宮脇村(旧地名)に創建したが、八世の孫讃岐守頼儀公は幕府に請願して、文化12年(1815)現在の烏帽子ヶ岳の景勝地にこれに移した。祭神は徳川家康公である。明治6年9月県社となり、明治15年11月、高松藩祖従四位左近衛少将源頼重公(龍雲院英公)を合祀。



3 2 大宮八幡宮

屋島中町新馬場にあり。

当社は初め郷社で、仲哀天皇・応神天皇・神功皇后を祭神とする。貞観の昔宮窪に建てた祠をこの地に遷宮し、産土神とした社である。





3 3 八坂神社

屋島西町中央にある。

当社は、朱雀天皇承平6年（936）に勧請した、旧喜多郷（現高松市木太町）に属していた神社である。初め社格は村社で、速須左男命を祭神とした産土神である。その当時、旧瀧元村に属していたが、交通の不便により一条天皇正暦元年（990）8月現在地に御分霊を勧請した。明治維新までは、牛頭天王（コヅテンノウ・親しみをこめててんのさん）と称していたが、明治2年3月に八坂神社と改称した。





3 4 鵜羽神社

屋島西町浦生にある。

社記によれば、古事記に鵜茅草葺不合尊が御降誕されたのがこの地であり、同書に豊玉姫のために八尋の産殿を造ったというのもこの地であると書かれている。

土地の故老によれば、社記なるものは紛失したのか見たことがないと言うが、その真偽はいかななものであろうか。



3 5 安徳天皇社

屋島東町壇の浦にあり。

安徳天皇をおまつりしてある。この地は昔、安徳天皇の行宮のあった所で俗に内裏跡ともいう。

金比羅参詣名所図絵に、内裏跡は天皇社の南方の田圃の中にあり、樹木が繁った所に残っているとあるが、今はその形跡はない。



3 6 鐘掛松の跡

全讃史に、屋島の南麓にあり、昔の陣鐘を掛けた松であるというが、今はその所在がわからない。

37 屋島寺

屋島の山上にある真言宗の古刹である。

昔この寺の堂前に雌雄同幹の老松があり、相生松と称していたが、先年枯れて今はない。

この寺は元北嶺に孝謙天皇勝宝6年(755)に唐僧鑑真和尚が創建したものを、後、弘仁元年(810)弘法大師が今の地に移し、南面山千光院屋島寺と号す。寺には屋島合戦当時の宝物が多く残されており、四国八十八カ所の第84番の霊場となっている。

本尊は弘法大師作の千手観音である。





38 仰之碑

屋島寺の西側に隣接してある。

これは明治36年、大正天皇が東宮におられた時、民情御視察のため香川県へ来られた時、同月11日屋島へ御登山されたのを記念して建立されたものである。

この時、記念運動場が建設された。



39 雪の庭

屋島寺の奥庭に、全面白色の土層が露出しているところがある。恰も白雪皚々の風情であるので「雪の庭」という。

昔この庭で住職の代替わりの時、太三郎狸が一族郎党を引き連れて、源平合戦の様子を再現して新住職に見せたとの言い伝えがある。



4 0 摂政宮御登臨記念碑

屋島寺の南の記念運動場にある。

大正11年摂政宮殿下（昭和天皇）が讃岐平野における陸軍大演習を御統監の後、11月20日南海御巡遊の御登山されたのを記念して建てられたものである。



4 1 獅子の靈巖

屋島寺の西方に突出した峯を西峯という。断崖を数歩下った所に奇岩がある。その形が獅子の頭に似ているので獅子の靈巖という。

その昔、弘法大師が屋島寺本堂大悲閣を建立したとき、まだ完成しないうちに、太陽が西に沈もうとしたので、大師がこの巖頭に立ち、扇をもって夕陽を招き返して工事を急がせ、一日で建立したという「一夜建立」の伝説がある。



4 2 地蔵寺

屋島西町中央にあり。

行基菩薩の創建で真言宗屋島寺の末寺である。創建当時は宝幢山延命院地蔵寺と号していたが、弘仁年中に弘法大師が屋島寺造営の時、修造を加えて花蔵院と院号を改めた。その後破壊されたが文禄年中に沙門良印と山地刑部が再興した。

本尊は行基菩薩作の地蔵尊である。

本堂のすぐ裏の南の端に、半跏趺坐の小さい地蔵が祀られている。この地蔵は延命地蔵で、里人は嫁いらず地蔵と呼んでいて、その御利益はあらたかであると言う





延命地蔵

4 3 忠名屋敷の跡

屋島西町にあったという。

清和天皇の御代に、大江忠名が罪により屋島に流された、ある夜杜鵑の声聞いて和歌を詠じた。(古今集)

杜鵑鳴く声きけばわかれにし

ふるさとさへも恋しかりけり

天皇はこれを聞かれて、忠名が京都を慕う心を憐れみその罪を許したという。
現在この屋敷跡はわからない。

4 4 梶原景山の碑

屋島西町塩釜神社の境内にある。

梶原重太夫は名は景弼と称し景山と号した。梶原氏の本姓は平氏で、景久の時に源氏に属した。後、讃岐国引田に移り住んだ。景山は屋島の西に石塩があることを知り、ここを開田して、宝暦5年（1755）に製塩場の竣工をみた。この塩田を亥浜という。



4 5 浦生（ウロ）

ここ浦生は、天智天皇6年（667）に築城された屋島城の船着場であった。

平安時代には、唐船などが来航する港（室）であったといわれている。

唐僧鑑真和上も来朝の途中、浦生海岸の鷓羽大明神に参詣し屋島に登山したという。この神社の南側を約1キロメートル奥の所に屋島古城跡の石畳が見られる。



山上より浦生を望む

46 「屋島の古墳」

故小竹一郎

この「屋島の古墳」は、屋島文化協会が発行する『文化屋島』のために故小竹一郎氏が執筆した第7号太古の屋島(三) 屋島の古墳(2)・第8号太古の屋島(四)屋島の古墳(3)から、貴重な研究結果を、広く世人に知ってもらうために再録したものである。

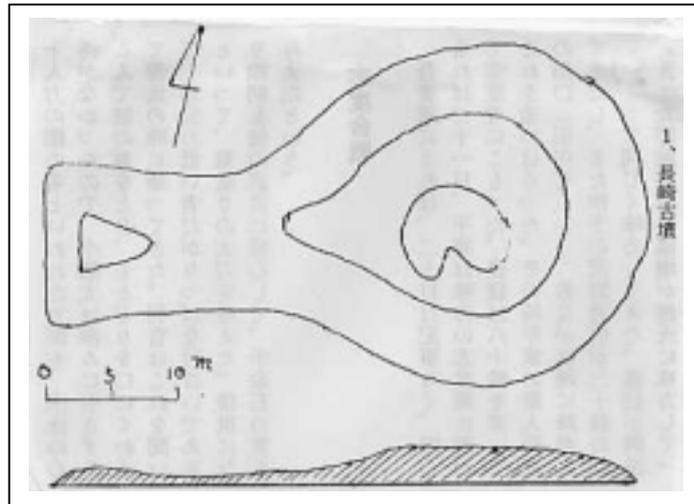
(1) 長崎古墳

屋島山の北端にある。台場山の標高50メートルの丘の上に南北向きに造られている。盛土前方後円墳で、後円部の直径約28メートル・高さ約2.4メートル、前方部の幅約12メートル・高さ約1.2メートルで、元の形をよく残している。現在後円部の中央に掘穴の跡があり、その横に石造りの小祠を祀ってある。付近には安山岩質の石塊が散乱し、盛土や葺石はかなり流出しているが、後円部の後面と東側面には葺石が2段あるいは3段に葺かれた跡が見られる。

明治初年に、一度発掘された当時の模様について、木田郡誌には次のようにつたえている。「発掘時には、庄屋・政所等立会し、後円部を六、七尺掘り下れば、掘抜式の石棺あり、蓋石を破壊して、中を見るに、頭を北東にして臥せりと思わるる人骨あり、棺中に刀二振、鍔一箇・直径約二五センチ程の太さに錆び固まりたる矢の根あり。棺身には、石枕のみならず、脚の部まで、形を彫付けありし」と。

長崎古墳の築造年代については、古墳時代中期のものと思われる。

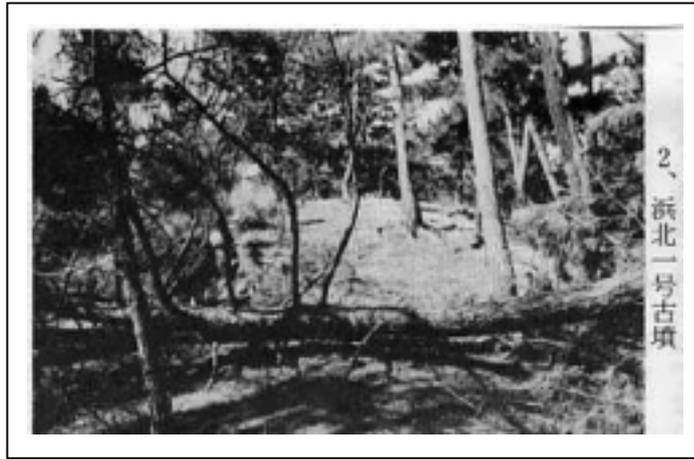
また、古墳は、一般的には、農業共同体の基礎の上に営まれた、と考えられているが、この長崎古墳は、農耕地とは、はなれた所に孤立して造られているので、どんな背景のもとに造られた古墳であるかが、問題とされている。



(2) 浜北1号古墳

屋島西町浜北の禿山と呼ばれている標高約30メートルの、小さい丘に、古墳が3基ある。

そのうちの1号古墳は、丘の頂にある盛土前方後円墳で、墳丘の軸長約30メートル・後円部の直径約16メートル・高さ1.8メートル・前方部の幅約8メートルである。葺石は殆ど失われているが、尚所々に残っている。規模は小さいが、攪乱されずもとの形を残している貴重な古墳である。



(3) 浜北2号古墳

浜北1号古墳の北隣にならんでいる。

盛土円墳で、墳丘の直径約15メートル・高さ約2メートルで、封土はかなり流出して墓石は見られない。

昭和47年6月この墳域から、土師器1箇を出土した。小さい古墳で、内部構造もわからないが、須恵器を用いた時代のものより、築造年代が古いもののように見える。



(4) 浜北 3 号古墳

浜北 2 古墳の西側下方、約 5 0 メートルの、西に面した傾斜地にある。盛土円墳で昭和 9 年 2 月松株を掘りとったとき、破壊されて、組合せ箱式石棺があらわれ、中に遺体が納められていたという。

現在は、墳丘の中央部で垂直に西半分が削りとられ、その断面にこわれた石棺の一部が露出している。



(5) 中筋北古墳跡

屋島西町中筋不動堂の裏の、標高 4 0 メートルの小さい丘にある。盛土円墳で、墳丘は山肌と区別ができないほど、流失している。明治初年に発掘されて、組合せ箱式石棺があらわれ、その中から腐蝕した刀剣数振を出土したという。

現在この古墳は、墳丘も石棺も失われてしまっている。

(6) 谷東古墳

屋島西町・農協学園グラウンドの上方善光寺横で、屋島山麓の南東に面した傾斜地の山林にある。横穴式石室のある盛土円墳であるが、封土は山肌と区別できないほど流失して、墳丘の大きさはわからない。

横穴式石室は玄室の奥壁に近い部分が一部残っているが、内部には天井石の近くまで土砂がつもっている。



(7) 中央西古墳

屋島西町中央、屋島小学校の西方、約 1 0 0 メートルの畑の西隅にある。盛土円墳で封土は失われ、横穴式石室も崩壊して、玄室の基部がのこり、その上に天井石などの巨石が集積している。玄室の奥行は約 5 メートルで、羨道の部分は失われている



(8) 中央東古墳跡

屋島小学校の北西方約 3 0 メートルの水田の隅にあった。

盛土円墳で奥行 4 . 6 メートルの、横穴式石室の玄室の部分をのこし、羨道の部分は失われていた。

昭和 4 3 年に宅地造成のため、この古墳は失われた。そのとき、須恵器の瓶 1 箇を出土した。

この古墳のあった場所は、現在の屋島西町 1 1 1 9 - 6、赤松幹男宅の東南隅である。



(9) 東山地 1 号古墳

屋島中町東山地の丸山と呼ばれている丘に、古墳が 2 基ならんでいる。

東側にあるのが 1 号古墳で盛土円墳であるが、封土は流出して蓋石を失った、組合せ箱式石棺が露出している。この石棺の上に、台座を築いて石造りの小祠をまつてある。石棺の半分は台座におおわれ、残りの半分は台座の前に見えている。明治初年に発掘され刀剣・須恵器のつぼ・曲玉など出土したと伝えられている。



(1 0) 東山地 2 号古墳

1 号古墳の西側に並んでいるのが 2 号古墳で、盛土円墳であるが、封土は流出してわずかに墳形をのこし、所々に葺石が見られる。明治初年に発掘され、人骨・刀剣を出土したと伝えられている。墳丘の直径は約 1 0 メートルで、現在この墳丘の中央に、金比羅神社をおまつりしている。



(1 1) 三崎古墳群跡

屋島東町三崎湯の谷西側の、高根座と呼ばれている小さい丘がある。頂上に2基南西の斜面に1基いずれも盛土円墳であった。明治初年にこの付近が開墾されたとき、破壊されて失われた。その時、須恵器が数個出土したことが知られている。

この古墳群は、古墳時代末期のもので、万塚ともいわれるものである。

(1 2) 経塚下古墳

屋島東町高根座の北東約300メートル、屋島山の山尾が、南東に延びた中腹にある。

円墳で、墳丘の直径は約10メートル・高さ約1.5メートルで、墳丘の中央に直径2メートル・深さ約1メートルの掘穴があって、攪乱の跡を物語っている。



(1 3) 萩山古墳跡

屋島東町藤目萩山の北側の窪地にあった盛土円墳である。

明治年間に発掘され、組合せ箱式石棺の中に、人骨が納められていたことが知られている。

この古墳は、その時破壊されて失われた。

(1 4) 浜北 4 号古墳

屋島西町浜北の塩釜神社の裏山にある。標高は約 4 0 メ - トル、山尾の稜線上に造られた盛土前方後円墳で、規模は小さく墳丘の盛土もかなり流失しているが、攪乱の跡は見られない。墳丘は北から南に延びた稜線上に、後円部を北にし、前方部を南に向けて築造され、墳丘の軸長は約 1 6 メ - トル、後円部の直径は約 8 メ - トル、前方部の幅は約 7 メ - トルである。墳丘の基部に並べられていた葺石は、前方部にわずかに見られる外は、ほとんど失われている。

